

薪樵たきぎこ

馬場 駿

未だ弱々しい四圍の緑の中で春の曖昧な陽射しを受けて咲いている、花というにはあまりにも夥おびただしく、むしろ、桜色の葉が生い茂っているというべき風情。私は、この桜の慎みの無い過度な自己主張が嫌いだった。

あの日、濃い水色の空に誘われて北鎌倉の駅に降りた私は、円覚寺側の臨時出口を通つてすぐ、心臓を突かれるような衝撃を受けてその場に立ちすくんだ。若い女が桜の幹に抱きついているのだ。木の芽時に気がふれたわけでもあるまいが、その動きはどう見ても常軌を逸していた。同じ電車から降りた人々が立ち止まっている私に次々とぶつかり、等しく非難の眼で振り返ってから線路沿いの道を先へ先へと進んでいく。彼らには女が異常にも見えず、この光景が妖あやしいとも思えないらしい。壮年の幹に白い指を這わせ情夫の顔ならぬ桜の花の群れを愛おし気に見上げている。薄紅色のワンピースが、風が吹いては体に纏わり、おさまっては女の綺麗な体の線を隠している。桜の隣家の細竹で造られた格子戸を見るふりをして女の顔を窺った。端正な顔立ちであることは分かったが、もう一つはつきりしないことがある。眼だ。狂女が詩人か。好奇心が常日頃の消極的な自分をどこかに追いやった。女の傍に駆け寄り不躰かつ唐突に「胸が痛むんです」と言ったのだ。女は一步二歩と後退りをした後で、私が見たかった瞳をこれ以上はないというほど大きくして静止し、数秒の間をおいて口許を小さく綻ほころびさせた。繭糸けんしを思わせる細くて光る前髪。その先には透き通るような白い額が微細な汗を含んで耀かがやいている。女の瞬きを待つ間、息を詰め勇氣を出して視線を女の全身に這わせた。「わたしも窒息しそう」見も知らぬ男に迫られた女は、それでもどこか遊び心を忍ばせて応えた。「桜に嫉妬したのかもしれませんが」と私の口が理性の承諾を得ないまま気障きざな台詞を吐いた。すると女は、別人になったかと思えるほど顔を崩し大声で笑い出した。

「あなた、お茶が入りましたよ」

里花子と桜の花に占領されていた私は、背後から突いてきた妻の声で現実の世界へ呼び戻された。

私の家の五十坪ほどの庭には花を誇れるほどの草木は一本もない。花崗岩と玉砂利を中

心にした造りで植物は羊齒じやうだと苔、そしてそれらを陽射しから護るための雑木しか配していないのだ。だから今の今まで見上げていた桜は隣家の、境界近くに聳そびえ立つ大木だ。その桜が散らす花びらがもうすぐ襲ってくる、侘わびを意識した私の大事な庭を派手な桜色で穢けがすために。私にとって傍らに里花子がいないときの桜は外敵に他ならない。しかしこの頃は自分自身が弱ったせいだろうか、昔ほど憎めなくなった。それどころか去年などは、はらはらと落ちる花びらにうっかり目を潤ませてしまい、終日自責の念にかられたりしている。

「あなた、聞こえていますの」

振り向かないでいると、妻がまた声をかけてきた。

「いつからそこにいたんだ」

私は背中を固くしたままで言った。

「あなたが桜に心を奪われた、あのときからずっと」

桜を介して里花子に会っていた私を、この二十年そうしてきたように、ただ黙って見詰めていたとでも云うのだろうか。せめてその沈黙の奥に炎が欲しい。いや、妻にそれがあるくらいなら里花子は要らなかった。あの日、あれほどの激しさで惹ひかれはしなかった。

「もう少し早く声をかけたらどうだ」

「かけてもよろしかったのですか」

不思議なのはこれが皮肉にならない、摩訶不思議な声の抑揚だ。地表にその一割も姿を見せていない巨大な花崗岩に匹敵する自信、妻にはそれがある。

「桜にやきもちでもないだろう」

私はうっかり裏返しの願望を口にしてしまった。

「あなたは内に花を植えずに外の花を愛でる人ですからね」

「……いいかげんに」

驚いた事に妻の名前が出てこない。振り向いたことを悔いた。四月のねっとりした南風が脂汗あぶらあせを噴き出させ傍らの令法りやうほうの木を揺らしていく。私の中では妻は妻であればよく、名前さえ不要だったのだろうか。

「しなさい」と結ぶままでにかなりの間があった。

妻は小さくうなずくと飛び石の上でくると身を翻ひるがえし、いつものように背筋を伸ばして玄関の中に消えた。そう、年に一度里花子に会いに鎌倉に行く私を眉一つ動かさずに見送るときとおなじように。

目の前をためらいながらひとひら桜が舞い下りていく。きっと「わたしを見て」と里花

子が呼んでいるのだ。

「枝にいるときと舞っているときだけが桜なの。落ちたらそのときからゴミ、哀しいけれど」いまも振り返れば私を変えた女がいる。窮地に陥るたびに創作意欲を沸き立たせ、救ってくれた女が立っている。家の中に消えた妻にも聞えるような大声で女の名を呼ぶと勢いよく振り返った。風が巻き空の青と薄桜色の花びらが混ざりあった。先が見えない、夢か現か、手の甲で瞼の上を擦り続けた。

恐る恐る開けた目の前に里花子が抱いた北鎌倉の桜が立っていた。幹はかつての倍の太さになっていたものの大きく捻じれ幾重にも裂けて老醜を晒している。年輪は縦の襞になつて露出し、モスグリーンのベールがそれを被い隠そうとしている。それでも花をつけ人目を引こうとしている風情は今の私そのままではないか。醜い。この一年間、一つも小説が書けなかった。原稿用紙の升目を見詰め蔑で苛立ちを抑えながら一体何日を空費しただろう。糊口を凌ぐため自分に妥協した週刊誌の駄文書き。それも今年の正月で先方から終止符を打たれている。

「お待ちになりました？」

最初からずっとどこかで見詰めていたかのように里花子は現れ、背後の景色に半ば透けたままで微笑している。

「今年は来てくれないのかと思いはじめていたよ」

桜の花の散るころというだけで、別に毎年同じ日に来るわけではないし、待ち合わせをしているわけでもないのだが、特別な嗅覚で解るのだろう、ここ数年は必ずこの駅前で待っていてくれた。

ちようど人の流れが絶えているのを幸いに里花子を引き寄せ、数枚の花びらと一緒に抱きしめた。潤んだ瞳は透き通り、淡い紅の唇は心なしか小刻みに震えている。その紅に触れたとき、唇だけでなく喉の奥まで凍てつくようで痛みさえ覚えた。

里花子は、はにかんでうつむくと約束ごとのように私の手を取り、艶な顔をゆっくりと東に向けた。初めて出会った日に二人して散策した鎌倉をもう一度というのだろう。何の異存があるうか。

歩きはじめると里花子の頬に赤みがさし、透けていた体が現実のものになっていった。

参道脇の三桮の花の可憐さに嬌声をあげ、紫陽花寺の境内では日向水木の直ぐな樹勢に驚き、黄色い連翹の群れの中ではその身を沈めたり現れたりして遊ぶ里花子。プリマドン

ナになって背丈を超える木瓜ぼけの、斑まだらのある赤の前で回る、回る、回る。見え隠れする下着もまた薄桜色だ。長い髪が跳ね、頬がほころび、齒が光る、柔らかな生き物としての胸が弾む。すべてが出会いの日と同じだった。

追いかけても追いつけはしない。親子ほどに違ってしまった心と体の歳。白髪混じりの頭、シミが色濃く出た皮膚、眼窩がんかの円そのままの眼の隈くま。登っている亀谷坂かめがやつが一年ごとに勾配をきつくしていくように感じる哀しさ。里花子は先を歩き、ときどき振り返っては戻ってきて私の手を引いた。そのときの笑顔の奥に、隔たってしまったものを無理にでも戻そうとする誘惑があった。

「お宅の中を拝見したいのですが」と、或る日スーツ姿の数人の男が突然現れ、その中の真四角な顔をした男が真っ先に口を開いた。

「断る、帰ってくれ」

「勘違いしなさんな、我々は不動産屋じゃない」

凄味のある声の男が目を剥むきながら前に出た。

知っている。鬼か吸血鬼が化けているのだ。「代々受け継がれてきた家作だ。私の代で手放すことは出来ん」と大見得を切った。しかしその後で急速に萎えていくのが自分でもわかった。終に家も土地も人手に渡る。

「跡継ぎもいなくせに。いえ、ろくにわたしを抱きもしなかつたくせに」

妻の声だ。「なぜ…」と狼狽うろたえる私を指差し男たちが一斉に笑い出した。

「里花子、これがいまの私なんだ」

誰にも言えなかった窮状を、勇気を出して口にしようと思つないでいる里花子の手を離し前に出て後ろを振り向いた。緩やかな崖の斜面、無秩序な名も知らぬ樹々、揺れる道端の草々…いない。誰もいなかった。逃げたのだ。後ろ向きで惨めな私を嫌ったのだ。二十六歳の、若いままの里花子に我慢はない。私は目を潤ませ涙はなを啜すすりながら坂を駆けあがった。途中、足がもつれ二度三度と転んで両手を地に着けた。里花子が怒って背中を突いているのかもしれない。真っ暗な空気が私を包み、一条の光が数体の地藏菩薩の所へと私を導いていく。極限まで収縮しそうな心臓の痛みと、割れて粉々になってしまいうような頭の痛みが重なる。口が何か大きな力でこじ開けられていく不思議な感覚。「ここで出しなさい。心に溜たまった澱おろを、罪のすべてを』地藏の赤い涎掛よだれかけが私の首に巻かれたような気がした。喉仏のどぼねがつぶれる音が聞こえた。私は下り坂を目にして救われ、声にならない声を発して闇雲に駆け下りた。

まだ心の中で黒い霧のようなものを引き摺^ずっている。嗅いでいる花の香だけが現世に生きている証だ。引き寄せられるようにして地蔵のお堂らしき建物の前に立った。

「わたし奥様にお許しをいただきました」と声がして錠が解かれ、中から里花子が出てきた。扉が里花子の体を突き抜けて閉じられ、錠が魔物よろしく動き音を立ててもとに戻った。里花子が扉の前に座り、ひざを合せた二本の脚が綺麗に左に流された。扉の板目模様がそのまま着衣の柄になっている。

「会ったのか、とうとう」

「ええ、きのうの夜、遅くなってから」

「さぞ恨んでいたろうな……」

妻の首から手を離れた時、小さな吐息を聞いたような気がした。従順な殺され方だった。従容^{しやうよう}として死ぬことが唯一絶対の報復だったのかもしれない。「嫉妬しないのか、お前は。それでも女として生きていると言えるのか」今日の鎌倉行きを告げても頷^{うなず}くしかできない妻を私は強い調子で詰^なった。

「嫉妬を殺すか、あなたを殺すか、わたしには二つに一つでした」

この応えが私の中に殺意を産んだ、明確なかたちで。

妻は妻として完璧だったといまでも思う。物欲を抑え、教養を隠し、口を積み、夫の後ろに控え、夫に尽くすことで自分の手腕をさりげなく示せる女。精神を誇りに替えられる女。しかしそれは、こと創作意欲の刺戟という観点からは最悪でしかなかった。だから名ばかりとは言え作家として生きていくため、心の棲^すみ処^かに里花子を同居させておく必要があったのだ。

「奥様は桜がお好きだったのですね、雪積む木、満開の桜をそうおっしゃるくらいに」

始めて聞く話だった。もちろん妻を連れて花見に行ったという記憶もない。おそらく隣家の桜を独り愛でていたに違いない。夫に対する小さなこの裏切り、桜に対する熱い想い。それは私の里花子へのそれとどう違うのか。

「軽蔑したろ？」里花子の隣に腰を下ろしてから小声で言った。

「いいえ。わたしが先生についていた嘘こそ軽蔑に値すると思います」

「中絶した子の父親候補が二人いたことか……」

里花子を知って一年ほど、逢瀬の度に関係を持ったが、妊娠を知らされたのはやはり鎌倉で、だった。五ヶ月と診断されたその当時、里花子は敗血症に因る血管内凝固症候群とやらに罹^{かか}っていると診断されていた。三十二歳だった私にはすでに妻がいたが、妻との間

には子どもが出来ず、存命中の母が妻を責めたこともあって夫婦仲は冷え切っていた。だから里花子には産んでほしいという気持ちもどこかにあった。

「ご存知でしたの」

すべてを見通せる世界にいるはずなのに里花子は心底驚いたような様子だった。

「でも先生の子というのは間違いありません」

その数年後偶然に無精子であることを知った。副睾丸炎を治療した際、ついでにと診てもらった結果だが、原因は思春期に罹ったおたふくかぜの可能性が強いとの所見だった。つまり里花子と寝ていたころも同じ、ということは、里花子は、私と並行して他の男とも肉体関係を結んでいたことになる。私は、遠い記憶の中から里花子呼び出して鎌倉で裏切りを語り、かえって自分の里花子への愛の深さを確認してしまう。だいいち、私自身、妻と里花子の間を爪先だって往復していたのではなかったか。歳月を経て心も落ち着き、いい思い出だけを拾い集めるようになったころから、里花子は頻繁に鎌倉に出てくるようになった。

里花子は素直に謝ると、「先生が抱いてくださったわたしの体は、あの水子の父親がくれたお手当てで維持していたのです。残酷ですね、心も体も生かすって、苦しんでどれか一つをと望んだら、神様が体の命を奪ってくれました」と言って涙を溢れさせた。たしかに中絶をした一と月後に体のあちこちに血栓が起って急逝している。

「誰に抱かれても女にとっては同じと思ってるんではしょね」

「いや…」と横を見ると、里花子の姿は消えていた。

惚けて歩き気が付くと、佇まいのいい寺の前だった。

人生は「底脱そこぬけの井」そのままかもしれない。落ちたら最期で、這い上がる術も浮き上がる術もない。海蔵寺かいぞうじの井戸を覗き、取り返しのつかない罪を犯した自分を水面に映してそんなことを思った。雪柳ゆきやなぎの白が彼方の山門を青黒く沈ませ、今まで感じたことがないような重厚な雰囲気醸し出している。その雪柳をくぐり心なしか明るくなった庭に入る。未だ花芽のままの躑躅つづじの先に満開の三桎みつまた。そこまでは風景だが、私の眼は、その三桎の前に佇む母子たなすと思しき二人連れを捉えて止まった。背の高い男は黒メガネに白い杖、明らかに盲人だ。彼に寄り添い何かを必死に説く初老の女性の眼は、無量無辺むりょうむへんの愛情に満ちている。彼の心の眼に映る三桎の花は果たして三桎なのか。笑みを湛えたた、しきりにうなずいている彼の中にも愛を受けとめる大きな器がありそうだ。決して傍らかたわに居る母親だけにその蓋を

開いているのではあるまい。そう思えた。どれくらいの間、母子の姿をおっていたらうか。二人の頬を撫でた春の風が、私の心へ温かさを運んできた。

母子が山門から出て行くのを見届け、海棠の花を見ようとして庫裏に近づいた。白い作務衣を着た僧侶が石畳の上を掃き清めている。先ほどこら純白の和紙のように綺麗にしていた気持ちがいよいよ一層度を増していくのを感じた。その直後、私は一瞬にして凍りつく。僧侶の彼方に見える衝立の文字が読めたのだ。草書体で「葬」だ。

妻が好んだ小鳥の柄の敷布団に糊の効いた敷布を皴一つないように敷き、掛布団は新婚当時の柄のものを出してきて純白のカバーで包んだ。その中に横たえるべき遺体は全裸にして全身を清め、たまたま見つけた淡い色の襦袢を着せた。さすがに死化粧まではしてやれなかったが、微かに赤みが残っていた唇に水を含ませ、白布を被せて合掌した。遠い日のことでも空想でもない、昨夜妻に手をかけた後で自分が実際にしたことだ。おそらく妻はまだ独りで眠っているに違いない。

強い力で頭を押さえられ、同時に支えていた力を全て失い、その場に崩れ落ちた。眼球を洗い出すかのように一気に涙が流れ、喉から悲鳴に近い声を出して泣いた。無慈悲に葬られるべきは私なのだ。

「行きましよういつものように源氏山に向かつて」

目の前で私の肩を優しく叩いているのは僧侶のだが、声は里花子だった。涙と涙が混ざり、長い糸を引いて大地に垂れている。私はただひたすら頷き続けた。

いつの間にか化粧坂の急峻な箇所を登っていた。里花子もきつと付いてくる。何度か二人で散策したコースのまま動いているのだから。崖から滲みだした地下水が足元を危うくする。ようやく乾いた土に辿り着いたとき、踏台を点々と置いたような白い坂に出会った。桜の花びらが降り始めの牡丹雪よろしく積もっている。振り返ると真っ直ぐに手を伸ばし、見えていない里花子の名を大声で叫んだ。指先が震え、青白く染まっていく。目を閉じて里花子の滑らかな肌を想った。首筋から鎖骨、鎖骨から脇、そして乳房に這い上がる唇。今もお燃えている情念が、落ちた桜を舞い上がらせ、里花子の顔をかたち造る。温もりを与えれば死者を呼べる。そう信じて疑わず自分の血を凍らせてもと、心に体中の熱を集めて念じた。悪寒が走り、眩暈が起り、心悸が極限まで亢進する。そうまでして何故……「里花子は自分の死と引き換えに私を選んだ。その私は妻を殺してまで死んでいる里花子を選んだ。だからだ」

朦朧とした意識の中で、自分自身の問いかけにそう答えた。

「いいえ、わたしを選ばなら奥様を殺してはいけなかったのです」里花子の首が急に現れてそう言った。滴る血が桜の花びらになって飛んでいく。

「さては妻があので嫉妬を？」確かに容易に想像できる。私は両の拳を震わせた。

「生きている間、どうしても入れなかったあなたの心にこうして入れたからでしょう」

浮かび上がるように出た妻の首が口を開いた。滴る血が今度はそのまま舞っている花びらを追って次々に捕らえ、鮮やかな朱に染めて大地にひとひらずつ落としていく。

「先生はこちらに来てはいけません」

「また同じ地獄の繰り返しになるからです、あなた」

「わたしだけ現世に戻り先生に抱かれるという選択肢もないのです」

「生きていると言うのか、私だけ」

浮かんでいる二つの首の前で頭を抱えて跪いた。最も過酷な刑になる。最も哀れな自分になる。

「あなたはもう死んでいるのです、里花子さんが亡くなった、そのときに」

「そう、わたしが死んで先生の中で生きたのと入れ替えに」

「もしそうならここに居る私は何だ、誰なんだ！」私はあらん限りの力で言い放った。

すると、急に二人の首が石のように固まり、落ちて化粧坂をコロコロと転がっていった。

血染めの花びらの群れを引き連れながら。

「大丈夫ですか？ 私の声聞こえますか？」

誰かが呼びかけている。それだけは分かった。

気を失っていたところを若い女性と外国人男性のカップルに助けられたのは憶えているが、そこから先のことは頭の中で消し去ったらしい。ただ今歩いている場所は分かる、隧道の入口だ。入って少しく暗くなってから里花子がついて来ているのが分かった、妊娠を告げられたあの日と、そう最後に二人で散策したあの日と、寸分違わぬ状況下に私はいた。たぶん立ち止り振り向いたとたんに抱きついてくる。顔を見たら思い出の通りにしようと思った。里花子は初めての日に紫陽花寺の帰りに寄った茶屋で、餡蜜を前にして少女のように舌をのぞかせると、「女はね、先生、こういうお店に入って男の愛情をテストしているのかもしれない。どれだけ照れくさいのを我慢してくれるのかしらって」と肩をすぼめた。振り向いた今、その時と同じ紅い舌で里花子は自分の唇を拭っていた。私はその動く

舌を追いかけ再び自分の唇で捕らえた。離しては頬ずりし、戻してまた唇を吸い続けた。通りすぎる車がライトを上向きに変えクラクションを鳴らして冷やかしていく。何台か同じ目に合ってはじめて里花子の眼を見詰めながら顔を離した。

「万葉集にこんな歌があるんです」

唐突な気がしたが、里花子は微笑みながら続けた。「…言いますね、きっとご存知でしょうけど。薪たぎ樵せうる鎌倉山の木垂たる木をまつと汝なが言はば恋ひつつやあらむ」

歌についての明確な記憶はないが大雑把に言えば、あなたが待つと言ってくればこんなに苦しい恋心を抱き続けることもなかったでしょう、という感じだったと思う。「行ってもいいよ、鎌倉山へ」何を伝えたいのかは理解したが、行ってみたいという単純な願いとして受け取ることにした…。

「あ、だめ、光則寺が先、大きな海棠かいどう見たいんです、それと長谷はせの観音様も」

踵かかとが楽しそうに弾んでいる。やさしい女だ。こちらの戸惑いの反応に合わせてくれる。

「はい、はい」と私は里花子の肩を叩き、そのまま肩にのしかかって歩き出した。

「先生、重いです、重いですったら」

半ば笑いながら里花子は抗議を続けた。

私は、いっそトンネルの出口がなければいいのにと本気でそう思った。

いつだったか、鎌倉は歩いてこそ鎌倉で、それが解かる人だけに鎌倉は本当の姿を見せてくれると里花子が言った。確かに里花子と二人で散策して初めて別人のような鎌倉に出会った。そしてその印象をヒロインに語らせた小説『りか子』が純文学新人賞になっている。

皮肉にもその受賞作が里花子のパトロンの逆鱗に触れ、彼女は身籠みこもった体で無収入の生活之余儀なくされてしまう。呑気だった私は有頂天になり、出版社の後押しで受賞後第一作というお定まりの企画に踊らされて、里花子の窮状を察しようとしなかった。里花子はまともな医療費もなく病状は悪化の一途を辿ったのだった。

「親兄弟はいないの？」

私が極限まで逼迫した里花子を見て残酷な言い方をしたときの、里花子の一言が哀しかった。

「身内が他人以上なはずだというのは先生、一つの信仰にすぎません」

産まれなければ育ちもしない代わりに醜く老いることもない。この世に産まれ出なかった水子の不幸と、里花子を護れずに死なせ、妻を自らの手で殺し、いまこうして無様に生きている私の不幸の狭間に、なぜか同じ形と同じ大きさの数多の地蔵がある。あの日、誰の子かと聞かずに里花子にありがとうと礼を言った。黙って頷いただけの里花子に嘘はなかった。太い紫煙の帯となって香がたなびき、何千何百という赤い風車が水子の霊をあやすべく緩急をつけて回っていた。風がそれを受けて鳴き声に変える。里花子と私は自然な形で瞑目し手を合わせたものだ。いまは、水子のための風車が消え、天から授かった命を己の欲望を護るために屠った男と女の、闇を救う地蔵菩薩の群れがあるだけ。合掌すらせずにただその中央に立ち尽くした。数えきれないほどの地蔵菩薩が必要なほど衆生は乱れているのか。自分の中の迷いの世界を脱しうる自分など存在しないというのか。

…：確かに、そうかもしれないと思った。

育つ途中で失えば、熟しもしないが地に堕ちて醜く潰れることもない果実。里花子がそれだ。里花子とのことは短かったがために、死という抗しがたい理由で終わったがために、私の心に美しく鮮明なまま刻み込まれた。

「ご主人ですね」と、里花子が中絶した病院の中年の看護婦が言った。このとき里花子はすでに離婚されていて法的には夫がいなかった。その後重症化した持病で入院した際も、「奥様が息を引き取られました」と、CCU(心臓集中治療室)から出てきた医師が言った。

時と所と人を変えての、承知の上で使われた嘘。言葉だけの乾いた思い遣り。その中に里花子と私の関係のすべてが集約されている。

里花子は隧道を出るとすぐに見えなくなっている。ただ、和かな声だけが耳の奥で囁き続け、今の今まで聞こえていた、長谷寺のこの地藏堂の前に立つまでは。里花子は本当に死んだのだろうか、少なくとも私の中では生きています。もし、里花子に不滅の靈魂があるならば、その栖はきつと私の心の中だ。

無数の黒の飛沫の中に観音像からもらった金色の飛沫が混ざっている闇。手前にある相当数の蠟燭の炎が、それをいつそう荘厳な空間にしている。迷える衆生のあらゆる願いを聞きとどけるといふ十一面観世音菩薩は、九メートルはあろうかという圧倒的な高さで目の前にいた。睥睨するのではなく距離をおいて自ら退き、その視線は遙か彼方の衆生が行くべき未来に向けられている。木像なのだから人間の手で造られたものにすぎない。冷ややかにそう思う自分が時間とともに突き崩され、終には力尽きてその場に跪いた。両掌

を床につき、頭を垂れ、澱おりのように溜まった心の汚物を全て吐き出そうとした。救いが欲しかった。そのとき耳ではなく心で声を聞いた、「やっと自分についた嘘を認めようとしたか」と。里花子が「身籠った子は先生の子です、だから先の短い私の命をこの子に継がせたい。産ませてください」と懇願したときだ、私は産むかどうかはその子の父親に訊きなさいと横を向いた。後に医師にそう言われたと云っても特に精子を提供してしかるべき検査をしたわけでもない。本当は私の子だと困るから逃げたのではないのか、おたふくかぜに罹患した過去は本当のことだが、横を向いた理由は薄汚れている。愛だ恋だなど聞いて呆れる。私は確かに自分への詰問に蓋をしまいに至っている。「先生の子でした、間違えありません」今度は耳元で里花子の声がした。

そうだとしたら悔いが残るのか。「いや、無理だ」と口に出した。産んでも産まなくても日浅くして里花子は死を迎えただろう。では誰が育てるのか、妻か。バカを言えというレベルだ。中絶は結局正しかった。そうだとしても「逃げたのは事実だ」とまた声にした。菩薩からの応えはなく、最初に見た闇が私の全身を満たしたとき、のそのそと惚けたように立ち上がる自分自身の姿が見えた。一緒に居るはずの里花子の気配がようやく消えていくのが分かった。

小一時間も寺から直近の駅のホームにいる。遊園地の電車のような独特の車両が近づくと、二本のレールを凝視し、心臓を高鳴らせた。切断され千切れる自分が見える。運転手の非難の顔が確認できるほどに近づくと、惨めにも後退り背後の椅子で止まった。乗降客が容赦のない侮蔑の視線を浴びせてくる。私は脹脛ふくらばねを揉み太腿ふとももを擦るこすふりをして下を向き、電車がホームを出て行くのをひたすら待った。

急に頭の上で誰かが私の名を呼んだ。確認するような口調だが間違いはない、私だ。顔を上げると警官が一人、半ば笑いながら前に立っていた。

「わたしに何か？」と言いなながら覚悟はした、妻の遺体が発見されたのだ。それにしても早すぎる、それに変だ、なぜ私がここに居ることを…。

「奥さんから捜索願が出ていますね、自殺する可能性があるということ、今朝方」
「嘘だ！ 妻は死んでいます、わたしがこの手で殺したんです」

告白したとたん一気に気持ちが悪くなった。

「はいはい、話はうちに帰って奥さんとゆっくり話して。これでも警察は忙しいんだから」と警官が私の腕をつかんだ。反射的に手錠を意識して両腕を前に出した…。

「重症だな。奥さんが心配するのも無理ないわ」

警官は、私ที่บ้านを真夜中に出たまま戻らず大船駅で一夜を明かしたと、長い時間北鎌倉駅舎の近くにいたこと、今居る駅でも不審な挙動を続けていることの全てを知っていた。「それぞれの駅から通報が入っています。それが服装その他の特徴が全て同じ。つまりあなたって訳です。あなたは疲れ切っているんですよ、だから空想と現実がごちゃ混ぜになっている。さ、奥さんの所へ帰りましょう」

そんなはずはない。妻は確かにこの手で首を絞めて殺したはず、私は千切れんばかりにして首を振った。すると目の前にキラキラ輝くものが見えた。桜だ。枝との離別を惜しみ、必死で抵抗しながらも力尽きて大勢の仲間と同時に散る花びら。桜の精たち。舞いながら春の陽射しを受け、まるで自分が光っているように装い最期を飾る。私はその花びらたちの中にいる里花子を見ていた。

「おい待て、電車が来る。戻れ、下がれ！」

しなやかな白い指が私を招いている。寂しそうな笑顔が、「先生、来て」と言っている。大きな怒鳴り声が背中に迫る。そう、声だけが。

…私は里花子に向かって飛んだ。もう、何の迷いもなかった。

完